

第 1 回利尻山登山利用検討会 議事概要

■日時 平成 20 年 9 月 9 日（火） 15:00～17:15

■場所 利尻富士町役場 2 階庁議室

■議事概要

1. 開会

2. 挨拶

3. 議事

(1) 検討会の設置について

- 事務局より資料説明（資料 1）
- 検討会出席者自己紹介
- 佐藤検討員を座長に選出

(2) 検討の背景、目的及び内容について

- 事務局より資料説明（資料 2）
- 質疑応答・意見交換

（検討員）・登山道整備基本計画と今回検討する利用のあり方の関係性を明確にすべき。その関係性によって議論する内容が大きく異なる。

・登山利用のあり方とは、具体的にどのようなイメージで誰に対して作るものなのか。

（事務局）・登山利用のあり方では、具体的な対策も議論していきたい。対策の効果、優先度、実現性を検討して、優先順位の高いもの、着手できるものから実施していくイメージ。

・登山道整備に関して、特に利用上の課題があるのは 9 合目上部である。環境省ではこの箇所における整備の工法について検討を進めているが、まだ工法が決定しているわけではない。効果が確認される工法があれば、その工法での整備を進めていく方針であるが、自然現象による崩壊など整備だけでは対応できない場合があると考えている。このような場合の対応については、利用のあり方の中で検討できると考えている。

・地域経済への影響などを考慮すると、利用制限はできるだけ行わない方針であるが、地域ルールのような形で、区間や季節など部分的に利用制限を行う方法も考えられる。

（座長）・利用の仕方から登山道整備を考えるのか、整備に合わせた利用を検討するのか、このような観点での議論もこの場で行うべきである。

(検討員)・沓形コースの閉鎖に関する話題や登山道整備の困難さなどから、今回の検討の最終的な結論には利用制限があるのではないかと、というイメージをもっていた。検討の方向によっては、地元経済にも影響が及ぶことから、大事なテーマである。

- ・頂上まで行きたいと思うのが全登山者共通の心理であると思う。
- ・法的な規制は現実的に可能なのか。または、天候や季節など条件によつての制限といった形があるのではないかと。
- ・登山道の荒廃を招いた最初の原因は人の利用によるものと考えられるが、これからは人の影響だけでなく、気象条件によつても登山道の荒廃は進行していくように思う。この状態で人の利用を制限するだけで対応しきれものなのか、という疑問がある。
- ・抜本的な対策を絞り込むまでの間も実施できる簡易な対策はないかと考えている。例えば2年程度維持できるような簡易な対策でも実施していなければ、登山道の荒廃はさらに進んでしまう。
- ・「利尻ルール」で一定の改善はみられるが、これだけでは対応しきれないのではないかと感じている。

(事務局)・整備のみでの抜本的な対策は困難。整備だけでなく利用のあり方も含めて検討していくことで、崩壊を少しでも緩和できる対策を考えたい。

- ・例えば、ジオウェブなど階段状の人工構造物を設けることによつて、安易に登ることができるようになり、その結果頂上付近で登山者が増加する可能性も考えられる。
- ・また、特に頂上付近の崩壊は自然現象であり、コンクリートで固めてしまうようなことをしない限り、崩壊を止めることはできないが、登山者がそこまでの整備を求めるとどうか。

(検討員)・9合目より上部の登山道を整備してもしなくても、今の利用の仕方であれば、登山者の数は変わらないのではないかと。9合目より上部に登りづらいため登らない、ということにはならず、みな頂上を目指して登ると思う。

(事務局)・例えば「ここが利尻山」というような標識を中間に置けば、雨天などの悪条件のときに、途中で引き返す判断ができない一般登山者が、頂上まで行かなくても達成感を得られるようになるのではないかと。その結果、雨天時の利用圧を抑えることになるのではないかと。

(検討員)・雨天時でも、登山者は頂上を目指すと思う。景色を楽しむことができない雨の中では、黙々と頂上を目指し、「頂上まで行ってきた」という満足感・達成感に浸ることが目的になっているようである。

(検討員)・ツアーを中止する場合の条件は何か。

(検討員)・風が強い場合にツアーを中止することが多い。

- ・個人的には、雨が降ることによって、スコリア部分は滑りにくくなり、逆に登りやすいと感じる。また、湿気によってスコリアが崩れにくくなっているとも思う。
- ・スコリアを崩さずに登ることができる人はいない。登山者は、山のことも自分の安全をまず考えてしまう。

(検討員)・自分がスコリアを崩した時に、その先の植生が埋まってしまう状況であれば自覚できるだろうが、合流点付近は広く堆積していて、自分がスコリアを崩したという印象を受けない。

(検討員)・登山道整備に関する報告書でも、その目的が山の崩壊を止めるためなのか、植生保護のためなのか、登山者の安全確保のためなのか、混同されているように感じたが、本検討でもこの点を明確にすべき。

- ・今回の検討では、登山道の整備の方向性に影響を与えるような部分にまで踏み込んだ議論すべきなのか、登山道整備の中で行われている議論の枠内であり方を議論すべきなのか。
- ・議論の方向性によっては、観光産業に影響が及ぶ。その場合、観光客を確保する対策まで議論するのか。
- ・最終的にはどのような登山をしていくのか、こういう人に来てほしい、こういう登山をしてほしい、というものと結びついてくるのでは。

(事務局)・山が崩れてしまえば登山者も来なくなってしまう。山を守りつつ、利用していくためには、地域の人々の決断が必要な場合もあるかと思う。そういったことも念頭において議論していただきたい。

(検討員)・崩壊や植生も含めて、山が危機であるとの認識に立って、登山利用のあり方を考えよう、ということ。「制限」という言葉を使うかどうか別として、その前提には、オーバーユースへの対応が必要であるという議論の方向性があると感じている。

- ・登山道整備との関係については、登山道が荒れない、長持ちするようなものを整備してほしい、という話にまでつながるのかどうか。

(事務局)・問題を共有し、山に密着している地元の方から多くの意見をいただきたい。

- ・今年は3回の検討会を予定しているが、永久的な課題だと捉えている。この3回の検討会で、利用制限の実施にまで話が進まないとは思いますが、まず全員で問題を共有することから始めよう、という趣旨である。

(検討員)・今回検討する登山利用のあり方と登山道整備計画との関係を早い段階で整理して、検

討内容に対する認識を共有しておくべきである。

(座 長)・登山道整備計画にも影響を与える議論をすべきかどうかについて共通認識をもっておく必要がある。

・登山道整備計画にある「ふさわしい登山道」とは何か誰もわからない。また、自分の認識と他の人の認識が同じとは限らない。

・解決できるかどうかは別として、それぞれどのような考えをもっているかお互い知るだけでも意味があると考えられるので、登山道整備計画の内容に影響するような議論まで行ったほうがよい。

(3) 利尻山の現状について

- 事務局より資料説明（資料3及び資料4）
- 質疑応答・意見交換

(事務局)・団体登山のうち、百名山登山ツアーの動向、全国的にみて人気のある登山ツアーの傾向などは、今後の方向性を予測する上で参考になる。

・利尻山と比較できる典型的な山の入込、北海道全体でみた観光の傾向についてもおさえておく必要がある。

(検討員)・百名山を目指す人は、あまりガイドを頼まない傾向にある。百名山を目的とする登山者が増えているか、減っているかはわからない。

(検討員)・団塊世代で、新しく始めた人が増えているように感じる。

(事務局)・少し前は百名山ツアーが登山ツアーの主力であったが、海外に行く人、より高峰を目指す人、低山を楽しむ人など百名山を目指していた登山者に嗜好性が生まれ、登山者のニーズの多様化が進んでいると言われている。その流れの中で、登山者が利尻山に求めるものも変わってくるのではないか。

(検討員)・6月に利尻山に来た時のフェリーの中でも、百名山の話をしている乗客がおり、まだまだ人気があるように感じた。

(事務局)・本州のいい山であれば、百名山かどうかに関わらず何度も登る人がいる。離島にあつてなかなか来ることができない利尻山の場合、「百名山だから」こそ目指す人が残っているのかもしれない。

- 「利尻山に関するアンケート」について事務局より説明

(座 長)・最後になるが、他に意見はないか。

(事務局)・登山道整備に関する基本計画と登山利用のあり方の関連性について補足したい。登山道整備の基本計画は登山利用のあり方を矛盾なく補うもの、と考える。また、整備の基本計画と今回検討結果に齟齬が生じるのは、9合目～頂上間を完全に通行止めにする場合だけだと思うが、そのようなことは今のところ考えていない。

・利尻山の自然を国民に広く利用してもらいたい。そのためにも、利尻山の自然をできるだけ傷めない登山のルールづくりのようなことをしていきたい。今回の検討会では、みなさんと一緒にアイデアを出し合い、すぐ着手できるもの／できないもの、短期的／長期的、優先順位などの面から検証したい。これらは登山者に対して示されるものであるが、その実施・周知は地元を中心に一緒に進めていきたい。

・登山利用に起因する利尻山の崩壊を少しでも抑える対策に結びつけたい。

・登山道の閉鎖は最終手段であり、できるだけ行いたくない。「規制」ではなく「誘導」という方法もある。

(座 長)・登山道の崩壊は明日にでも起こるかもしれない。事前に対策を考えておくことも必要であると感じる。

4. その他

(1) 今後のスケジュールについて

- 事務局より資料説明（資料2）

(2) 翌日の登山（現地検討会）について

- 事務局より資料説明（資料5）

5. 閉会

第 1 回利尻山登山利用検討会（現地検討会）

■日時

平成 20 年 9 月 10 日（水）

■検討員等の意見の概要

- 途中で受けた登山道に関する説明や登山道の荒廃を防ぐための施工について聞くことができ、スコリアの流れなど、これまであまり気にしていなかったことが身近に感じられるようになった。次回から気にして見ることができるように思う。
- 強風のため、現地で討論できなかつたのが残念。今回の現地検討で感じたことを次回にいかしたい。
- 登山道整備において、水の流れをどのように制するか、という意味では、治山・砂防などの技術が大きく関わってくるのではないかと。
- 3m スリットは前回登った 6 月からも状況が変化しており、見るたびに・毎日姿を変える、という言葉を実感した。
- ジオウェブなど最近施工されたにも関わらず土砂が堆積している状況を見て、施工の困難さを感じた。
- 施設整備だけでなく、利用のあり方を考えることは重要である。
- 警察の目から見ると、事故があった場合に管理責任が問われる。事故が起きた時のことを考えながら登山をしていた。
- 3m スリットの前後は施工されているが、3m スリット区間は特に対策が行われていないため、管理者責任を問われたらどうなるか、という点が気になった。
- 風の強い日に「親不知子不知」を通ったことがなかったので、風の影響で落石が起きる状況を目の当たりにしたことは収穫だった。
- 登山道整備の試験施工箇所などをみて、施工後の維持の困難さを感じた。
- 整備の話題が中心になり、利尻山登山のあり方の話ができなかったため、次回の検討会でみなさんと議論したい。
- 説明を受けながら、危険箇所などを把握するよい機会となった。
- 合流点上部は、前回（春）登った時より歩きやすくなり、成果が出ているように感じた。より登りやすくなるよう考えていきたい。
- 現場を見て、今年事故なく登山者が安全に利用しているのは、地域のみなさんの取り組みのおかげであると実感した。
- 携帯トイレについて知らない人が多いと考えられるので、よりアピールすべきである。
- すれ違った家族連れやコンビニの袋を提げた登山者などを見て、登山道整備だけでなく、携帯トイレや最低限の登山装備などについて登山者へ周知し、登山者自身の自覚で安全で楽しく登山してもらうようにもしなければならないと感じた。
- 今日ほどの強風の中を登ったのは初めてで、親不知子不知で、風の影響で落石が起きること

がわかった。今後、宿泊者へ情報提供ができると思う。

- 石組みなど、自然にあるものに思っていたものが、人によって整備されたものであることを知った。
- 登山は危険で楽しくないものと認識している。安易な気持ちで登る人の対策が課題で、利用のあり方を考えるポイントもそこにあるのでは、と考えている。
- 風の強さ、雨量などによって登山を控えてもらうための情報提供は必要ではないか、と感じた。
- 登山を楽しみに来ているのだから、自分の命を危険に晒してまで頂上を目指すものではない、ということを登山者に知らせるべき。
- 登山者が歩けば、どうしてもスコリアが崩れてしまうことを実感し、今後の登山利用を考えるにあたって、避けられない点であると認識した。
- 登山道として利用を存続できるように、これ以上登山道の浸食が進まないように、様々な試験施工を行っていることを考えると、登山道を閉鎖してしまうのは寂しいことであると感じた。
- 今回のように「親不知子不知」で風が吹くだけで落石が起こる状況などを見て、状況に応じた具体的なアドバイスをできる人が島内に多数いるようになればいいと思う。
- みなさんと共通認識をもつことができた点が一番重要。
- 管理者責任もあるが、登山自体が危険な行為であることから、自己責任にたった登山を認識してもらうことも大事である。
- 責任問題も含めた利用のあり方を検討していくことができればと思う。